



第1回

【十三峠街道】

山形県置賜地方から新潟県下越地方

米沢と越後を結んだ石畳の道



黒沢峠の敷石道

イザベラ・バードが泣いた峠道



明治11年（1878）7月、イギリスの旅行家イザベラ・バードは、新潟から山形に向かう途中の、大きな峠の入り口に立っていた。これから始まる山道での経験が、自分が日本で出会う最難儀の旅の一つになるとは、まだ知る由もなかった。鷹巣峠から始まり諏訪峠まで連続する十三もの峠道を、



宇津峠から見た置賜（米沢）盆地。バードが見て「アルカディア」と称えたのはここからの景色だった



晩年のイザベラ・バード（日光金谷ホテル所蔵）

米沢から出る四街道のひとつ

米沢から北の山形につながる糠ノ目街道、東の福島に向かう板谷街道、南は会津につながる会津街道、そして西に向かうのが十三峠街道で、「越後米沢街道」とも呼ばれている。

米沢を起点とする越後関川までの街道で、伊達家十四代種宗による大里峠開削（大永元年・1521）に街道の歴史が始まる。江戸時代には宿駅も整備され、置賜側からは越後上布の材料となる青芋（カラムシ）やたばこ、小国蔵米が、越後側からは塩や棒タラ、身欠きニシンなどの海産物、古着などが運ばれた。峠の山道は急なため、荷を運ぶ牛馬は足を取られる。また雨が続きと道がぬかるみ、土砂が流される。それを防ぐため、「簡易舗装」がほどこされた。それが今に残る敷石道である。

敷石道を守る人々

「歴史の道百選」や「日本風景街道」に選定されている黒沢峠の敷石道。3600も続く石段が土の中から掘り出され、黒沢峠敷石道保存会を結成したのが昭和55年のこと。

「ほかの峠にも敷石がある…」と、積もる腐葉土を掘って発見されたのが菅野峠。またほかの峠にもあるに違いないと、地元の方々は考えている。

十三峠は生まれ変わり始めている。敷石掘りイベントもそうだが、街道を使ったツーリズムの可能性が期待されている。取材でチャレンジしてみたら、3泊4日の楽しい峠歩きが出来た。途中には温泉旅館やマタギの宿、雑穀をはじめとした伝統料理やどぶろくもある。これが旅好きに受けないわけがない。歴史の峠が、街道ツーリズムの舞台になる日も近いだろう。



山形・新潟県境となる大里峠には地藏堂が建っていて、中には大里大明神が祀られている

バードは2泊3日の行程で越え、「日本奥地紀行」に記録した。

雨に降られ、ぬかるんだ坂道に耐えかねた人力車夫には戻られてしまい、歩くしかなかった。途中には満足な宿は無く、まともな米も手に入らない。川は雨水で溢れ、酔った女性が道をふらふら歩いているというあり様だった。

しかし黒沢峠の下にある市野々から少しずつ雰囲気良く始め、宇津峠の頂上からは光り輝く盆地を垣間見ることが出来た。バードが言う「東洋のアルカディア」の始まりである。

明治5年（1872）にも、この峠道を越えた外国人がいた。フランス人宣教師J・M・マラン神父で、その記録は『東北紀行』に残されている。天明8年（1788）には幕府巡見使の古川古松軒（『東遊雑記』）が、また、浅田次郎の小説『壬生義士伝』のラストにも、主人公の息子が峠を越えるエピソードが出てくる。このように置賜と越後を結ぶ重要街道が、この十三峠街道だった。



宇津峠に立つ道普請供養塔

十三峠は国道113号に沿っていて、国道沿線には道の駅・いいで（飯豊町）、道の駅・白い森おくに（小国町）、道の駅・関川（新潟県関川村）がある。

※今年は「イザベラ・バード in 十三峠」というイベントが開催される（7月11日～13日）
TEL 0238-62-4374（第1回「イザベラ・バード in 十三峠実行委員会」事務局）



NPO 法人 ここ掘れ和ん話ん探検隊

敷石掘りイベントの共催と事務局を担当し、峠を守る活動をしている「NPO法人ここ掘れ和ん話ん探検隊」。敷石掘りイベントは、毎年行なわれている。

毎回、県内外の子どもから大人まで多くの人たちが100年以上前の石畳を掘り起こしている。



◀お昼に地元のお母さん達が作ってくれる美味しい雑穀料理。